

私の大切な飛島

三年 齋藤 祥子（平成五年度）

私には二人の兄がいます。私も兄達もまだ小さかった頃、母が兄に、「大きくなったら何になりたい。」と聞いていたことを覚えています。私の家は漁業だったので、兄達はいつも「家を継いで漁師になりたい。」と言っていました。でも、中学生ぐらいになると、その兄達も、「飛島を出て働きたい。」と言うようになっていました。

私も中三になってから、母に、「働くようになっていたら、飛島に帰ってくるか。」と質問されました。小さい頃だったら喜んで「帰ってくる。」と言っていたかもしれません。でも、今の私は「お盆と正月ぐらいしか帰ってこないかも。」と言うだけでした。母はいつも私達に、「自分の働きたい所で、自分のやりたいことをすればいい。」と言ってくれましたが、母がどんな思いでこう言ってくれるのか、私にはよくわかりませんでした。

私の生まれ育った飛島は、周囲十キロほどの小さな島ですが、すきとおったきれいな海に囲まれ、たくさん緑があふれているとても美しい所です。そればかりでなく、飛島の人達は、あいさつをしたら必ず返してくれるとても親切な人ば

かりです。私はこういう飛島がとても好きなのです。

しかし、飛島全体がかかえている問題はとても深刻です。何年前までは、子供の人数もかなり多かったです。現在では、過疎化がどんどん進んでいます。以前は千人以上いた人口も、六百人ぐらいになってしまいました。

そればかりではありません。飛島の家を継ぐという後継者も、どんどん不足しているのです。私達のような若い人が家を継がないことには、これから先、未来の飛島は、どのようになってしまうのでしょうか。

飛島の将来を考えると、確かに、「帰ってこなければ。」と思うのがあたりまえかもしれません。でも、自分の将来のことを考えると、どうしても飛島に残って家を継ぐ決心がつかないのです。

私の将来の希望は、まだはつきりしていませんが、高校を卒業し、できれば大学を出てから、県外で働くことを希望しています。このことを父や母に言った時、父も母も表情一つ変えずに、「それでいいならいい。」と言ってくれました。しかし、今考えてみると、父母の心の中の本当の気持ちは、そうでなかったような気がします。きっと、飛島に戻って家を守ってほしいと望んでいるのではないかと思います。兄達も、小さい頃の漁師の夢を捨て、飛島を出て働くことを希望した今、ずっと続いてきた漁師も、父の代で終わろうとしています。父にとってはつらいことだと思います。私か飛島に残る

と言ったら、どんなに喜ぶでしょう。しかし、やっぱり決心はつかないのです。私も、自分の将来の希望は決して捨てられないからです。

飛島のために、若い私達がやっていかなければならないこと。私は、他の土地で働いても、飛島のよさを忘れず、時々帰ってきたと思います。もちろんこれだけでは、飛島のためにはならないかもしれません。でも、それでも私は、少しでも父や母を安心させたいのです。

私は、来年の四月には、高校へ行くため飛島を離れて暮らすことになると思います。今まで暮らしてきた十五年間、私には故郷での思い出がたくさんあります。飛島を離れても、ここが世界で一番好きな所です。私は、「飛島が好きだ。」という気持ちを、飛島にいても別の土地にいても決して忘れません。私は、自分の故郷を永久に残しておけたらどんなにうれしいだろう、と思つています。中学校を卒業するまでの間、飛島での一日一日を大切に生活し、飛島のよさをもっとたくさん知っておきたいと思つています。